

明治六年八月刊行

權大内史箕作麟祥譯

佛蘭西
法律書
憲法

文部省

CF2
3
07

佛蘭西法律書

例言

一佛蘭西法律書ハ憲法、民法、訴訟法、商法、治罪法、
刑法ニシテ民法ハ人民互相ノ際ニ管スル通
義ノ條則ヲ記シ訴訟法ハ訟ヲ聽キ争ヲ息ム
ル其審理裁判ノ條則ヲ記シ商法ハ商賈ノ互
ニ品物ヲ貿易シ其産業ヲ營スル條則ヲ記シ
治罪法ハ犯者ヲ糾訊シ其罪ノ信疑有無ヲ推
究スル條則ヲ記シ刑法ハ犯者ノ罪狀既ニ定
マルノ後其輕重ニ從ヒ之ヲ刑ニ處スル條則

佛蘭西法律書

例言

一
下
首

ヲ記シテ書首ニ冠スル憲法ハ建國定制ノ大
 基本ヲ記セシ者ナリ而シテ此六者中憲法ハ佛
 國ノ政體變革スル毎ニ其法亦隨テ更改シ一
 定不易ノ者ニ非スト雖モ民法以下ノ五法ハ
 拿破崙一世帝ノ時創定セシ以來政府國民ト
 相與ニ之ヲ遵奉シ世々通行ノ典タルカ故ニ
 永ク更改ス可キニ非ス然レ時勢ノ推遷互ニ
 其宜キヲ異ニシ民情ノ趨向亦相同シカラサ
 レハ其條則中補訂廢改或ハ亦免レザル能ハ
 ス古今互ニ小異同アリト雖モ此六法ノ微ヲ

折ク精ヲ極メ糸毫モ遺ス所ナキハ法科ノ書
 中集メテ大成セシ者ト謂フ可シ故ニ方今歐
 土ノ各國互ニ折衷シテ之ヲ其國內ニ行ヒ守
 内ニ於テ特ニ著名ノ書トス

一 此書ハ法科ノ書中特ニ精微ヲ極メ其趣旨深
 奧ナルカ故ニ佛國ノ法學士輩互ニ之カ註釋
 ヲ加ヘ其義ヲ講明スル者多ク就中其精詳ヲ
 盡ス者ハ其書幾ント數十卷ニ充テ彼土ニ於
 テモ讀者固ヨリ以テ易々ノ業ト為サ、ルナ
 リ故ニ今此書ヲ讀ム者ハ沉潛反覆先ツ全書

ノ大旨ヲ了解シ然ル後互ニ其表裏ヲ為シテ
 相照應スル所アルヲ知り始メテ其端緒ヲ得
 ルニ至ル可ク一再讀過頓ニ通曉ス可キニ非
 ス冀クハ覽者地誌歴史等ノ一目瞭然タル者
 ト同日ノ觀ヲ為ス勿レ

一此六法ハ佛國ノ一大典型ナルカ故ニ何人ノ
 合纂セシ原本タルヲ論セス固ト相異ナルノ
 理ナシト雖モ其條則中補訂廢改ニ係ル者ハ
 之ヲ合纂セシ者此ニ載スル所或ハ彼ニ遺レ
 間小異同ナキト能ハス今此ニ譯スル者ハ口

ワイエー、コルラー、ル氏ノ合纂セシ原本ヲ用
 フ

一書中原名ノ邦語ニ譯シ難キ者或ハ邦語ニ譯
 スルト雖モ其義ノ通曉ナラサル者ハ初出ノ
 條ニ於テ嵌註ヲ加ヘ以テ之ヲ釋キ再出ノ條
 ニ於テ復セサル者其煩ヲ省クカ為メナリ

一此書ハ余カ嘗テ繙譯スル所ニ係リ民法刑法
 ノ二書ハ既ニ之ヲ梓ニ上ス然レモ當時專ラ
 刊行ヲ促カスノ急ナルヲ以テ全部ノ譯了ヲ
 待タス從テ譯スレハ從テ刻シ卷中ノ異同謬

脱令ニ在テ之ヲ思フ釋然懷ニ憾ナキ能ハス
 因テ更ニ之カ校訂ヲ加ヘ其異同謬脱ヲ改刑
 シカメテ其當ヲ得ルヲ期スルト雖モ法律ノ
 學ハ歐土ニ於テ固ト専門ノ一科ト為シ其國
 人ニ在テモ此學ニ從事スル者數歲ノ力ヲ極
 メ講究ノ後ヲ待テ其詳ヲ盡スヲ得レハ顧ミ
 ルニ卷中ノ異同謬脱再誤ノ譏ヲ免レサル者
 猶少シト謂フ可カラズ殊ニ法律書ノ如キハ
 縱令自カラ詞意ノ艱深ニシテ文義ノ窒滯ナ
 ルヲ覺ユル者アリト雖モ臆度附會ノ敢テ刑

定シ得可キニ非サレハ行文ノ際其通暢ヲ缺
 ク者亦或ハ少カラス讀者宜シク其意ヲ諒ス
 ヘシ

明治六年癸酉六月 權大内史箕作麟祥 誌

例言終

佛蘭西憲法目錄

○憲法ヲ制定スル原由



○佛蘭西共和政治ノ大統領路易拿破崙ノ

佛蘭西人民ニ告諭ノ書

○千八百五十一年十二月廿日及ヒ廿一日ノ

投票ニ因リ佛蘭西人民ノ路易拿破崙保那

巴ニ授ケタル威權ヲ以テ制定シタル憲法

○第一章

○第二章 共和政治ノ政體

○第三章 共和政治ノ大統領

○第四章 元老院

○第五章 議院

○第六章 參議官

○第七章 大審院

○第八章 總規則及假規則

○憲法ヲ改正スル千八百五十二年十一月七日ノ元老院決定書

○十一月廿一日及ヒ廿二日ノ國民ノ投票ニ因リ確定シタル千八百五十二年十一月七日ノ元老院決定書ヲ布令シテ法律ト為ス

千八百五十二年十二月二日ノ勅書

○千八百五十二年十一月七日ノ元老院決定書ノ第四條ニ循ヒ保那巴ノ家族中ニ於テ帝位ヲ嗣ク可キ者ノ順序ヲ定ル千八百五十二年十二月十八日ノ憲法ノ基礎タル勅書

○千八百五十二年一月十四日ノ憲法ヲ釋明シ且之ヲ更改スル千八百五十二年十二月廿五日ヨリ三十一日ニ至ル元老院決定書
○帝位ニ屬スル入額ヲ支配スルニ付キ千八

百五十六年四月廿三日ノ元老院決定書

○攝政ノ事ニ付キ千八百五十六年七月十六日ノ元老院決定書

○第一章 攝政

○第二章 攝政ノ會議官

○第三章 諸種ノ規則

○憲法ノ第三十五條ヲ更改スル千八百五十七年五月廿七日ノ元老院決定書

○議院ノ員ニ選舉ヲ得ント欲スル者投票ヲ始ムル日ヨリ前八日内ニ千八百五十二年

十二月廿五日ノ元老院決定書ノ第十六條ニ定メタル誓詞ヲ記セシ書ヲ州長ノ官署ニ納ム可キヲ規定シタル千八百五十八年二月十七日ノ元老院決定書

○憲法及ヒ殊ニ其第四十條第四十一條ヲ更改シタル千八百六十六年七月十八日及ヒ廿二日ノ元老院決定書

憲法目錄終

此書ハ題シテ佛蘭西憲法ト總稱スレド元來其
憲法ハ千八百五十一年十二月廿日及ヒ廿一日
ノ投票ニ目リ佛蘭西人民ノ路易拿破崙保那巴
ニ授ケタル威權ヲ以テ制定セシ第一條ヨリ第
五十八條ニ至ル條件ニ係リ其他ハ皆其中ヲ或
ハ追補シ或ハ更改セシ皇帝ノ勅書及ヒ元老院
ノ決定書タリ故ニ其勅書決定書ハ此書ヲ輯ス
ル者ノ意ニ循ヒ或ハ刪除シ或ハ編入シテ每書
各同シカラス加フルニ近歲佛國ノ政體一變シ
テ共和政治トナルカ故ニ更ニ其改定ヲ經タル

條件モ亦少シトセス然レモ要スルニ此憲法ノ
 大旨ニ於テハ固ト敢テ移易變動ス可キニ非ス
 シテ殊ニ方今佛國ノ共和政治ハ更改ノ日猶淺
 ク其政體未タ確然不拔ノ者ト為ス可カラサレ
 ハ今姑ク原書ノ載スル所ニ從ヒ拿破崙三世帝
 ノ制定シタル憲法ヲ其舊ニ依テ此ニ譯シ以テ
 梗槩ヲ示スト云

箕作麟祥 誌

佛蘭西憲法
 法律書

權大内史箕作麟祥 譯

○憲法ヲ制定スル原由〔千八百五十二年一月
 十四日布告〕

○佛蘭西共和政治ノ大統領路易拿破崙ノ
 佛蘭西人民ニ告諭ノ書

去歲十二月二日ノ布令書ニ佛蘭西國ノ政體ヲ
 創建スル為メ緊要ノ基礎ハ何物タルヲ余カ嘗
 テ思念セシ所ニ就キ以テ誠實ニ汝衆庶ニ告諭

セリ而ノ余カ當時ニ在テ思念セシ所ハ世人ノ
常ニ称道スル如ク敢テ一己ノ私説ヲ以テ數百
年間實際ノ試験ヲ經タル定論ニ換用セント欲
スルニ非ラス唯往時ニ在テ當今ノ軌範ト為ス
可キハ何物ニシテ其軌範ハ又何人ノ之ヲ今ニ
遺シ且何等ノ裨益ヲ生セシヤ此等ノ數事ヲ講
求セント欲セシニ在リ故ニ尔来余ハ世人ノ實
踐ニ閱セサル飾觀裝聽ノ論說ヨリ寧ロ俊傑ノ
士躬行ノ跡ニ就キ其精英ヲ採擇シテ時ニ施ス
ノ道理ニ合スルヲ思ヒ此ニ於テ千八百年代ノ

初メ其形勢ノ恰モ現今ト相似タル危殆ノ佛蘭
西國ヲシテ康寧ノ景福ヲ享ケ隆盛ノ極治ニ至
ラシメタル其政體ヲ以テ軌範ト為ス可キヲ決
セリ而メ顧ミルニ又其政體タルヤ往時特ニ歐
洲諸國ノ全カヲ合シ我佛蘭西國ニ抵敵シテ纔
カニ廢滅ニ至ラシメ人民劇發ノ變ニ因リ頓ニ
崩潰ニ至リシ者ニ非サレハ是レ亦余カ以テ軌
範ト為ス所ナリ因テ此ニ余カ大趣旨ト為ス其
要ヲ概言スルニ凡ソ我此佛蘭西國ハ政法ノ施
設、兵旅ノ簡閱ヨリ審判、法教、經濟等ニ至ル迄要

スルニ皆嘗テ「コンヒル」政治及ヒ皇帝政治ノ際
 創定シタル條規即チ拿破崙一世帝ノヲ遵用シ
 創定レタル者ヲ云フヲ遵用シ
 今ニ於テ既ニ五十年ニ及ヘハ豈其政體ニ於テ
 獨リ之ヲ遵用セサルノ理アラニヤ況ヤ其政體
 ハ夫ノ政法、兵旅、審判、法教、經濟等ノ條規ト同シ
 ク亦嘗テ拿破崙帝ノ慮定セシ所ニ出レハ其我
 國家ヲ利シ以テ人民ヲ益スルノ微義ヲ具フル
 ヤ必セリ「加フルニ余カ嘗テ布令セシ書中既ニ
 辨明シタルカ如ク今ノ此佛蘭西ハ蓋シ千七百
 八十九年ノ大變革ニ因リ改造シタル國ニシテ

往昔ノ政憲ハ今ニ至リ猶其鴻益ヲ享ケ衆庶ノ
 特ニ追慕スル所ト雖凡其制度典章ハ當時ニ在
 テ盡ク散滅シ今ニ於テ存スル者ハ亦皆大變革
 ノ後拿破崙帝ノ創定セシ所ニ出レハ此佛蘭西
 國ハ實ニ拿破崙帝ノ整修條治セシ者ト謂フ可
 キナリ故ニ今其變革尔来更修シタル梗槩ヲ舉
 ケ之ヲ論スルニ往昔ノ「プロクソン」古ノ土地ヲ
 「ペーデタ」古ノ其轄内ノ諸務ヲ管理セシ「國」
 「マ」古ノ裁判各州ノ監察使「ヘルミエー」ゼ子ラ
 「ル」政府ノ為メ國中ノ租各地殊異ノ風習封建ノ

制度文武ノ官ニ補任ヲ得ル特權ノ貴族諸般法
 教ノ管轄等ハ夫ノ大變革ノ日其政令ト並行ス
 可キニ非サルカ故ニ當時悉ク之ヲ更改シ方今
 復タ存スル者ナシト雖モ變革ノ際未タ其制度
 ヲ確定シ治法ノ後ニ垂ル可キ者ヲ創スルニ及
 ハス是以テ凡ソ今ノ我佛蘭西國ヲ合同ナラレ
 ノ百官有司ノ職制ヲ立テ政治ノ基礎ヲ固定シ
 タルハ是レ皆嘗テ拿破崙帝ノ心カヲ竭セシ所
 ニ出テ當時ニ在テ其制定シタル佛蘭西國各地
 方行政ノ權ヲブレヘ一州ノ官吏ヲ管轄スウブレヘ

一郡ノ官吏ヲ管轄一邑ノ官吏ヲ管轄ニ任シ以テ往
 昔各地各異ノ政治ヲ一定ニ為シ且諸務ヲ決議
 スル權ハ一州ヨリ一邑ニ至ル迄皆人民ノ選舉
 スル代理者ノ會議ニ任シ又裁判役ヲシテ畢生
 間其職ニ居ラシメ裁判所ノ等級ヲ立テ、其權
 ヲ牢固ニ為シ下ハ治安裁判所ヨリ上ハ覆審院
 ニ至ル迄皆其統轄ノ諸務ヲ分明ニ限制シ以テ
 審理ノ法ヲ容易ナルニ至ラシメタル諸件ノ如
 キ今猶現ニ之ヲ循用ス而ノ又我國最良ノ經濟
 法國立銀鋪ノ設立政府ノ歲出歲入ノ積蓄政府

出額入額、検査院及警察ノ制度兵制ノ規律等モ亦皆拿破崙帝ノ時創定セシ所ニ循ヒ就中我國五十年来人民交誼ノ條則ヲ定メレハ即チ拿破崙帝ノ創制シタル民法ニ在リ又我政府ト僧徒ノ交際ヲ定メタルハ嘗テ拿破崙帝ノ羅馬教皇ト結ヒシ條約書ニ因リ其他製造貿易學術技藝ノ進歩ニ管スル法令モ其「アトルフランセ」ノ演劇「プロムドン」製造所ノ財主トエ「ト争」ノ規則ニ於ケル細故ヨリ大學社及ヒ「レジラント」ノ「文武」者ヲ論セス國ニ大勲勞等ノ大事

ニ至ル迄亦其過半ハ拿破崙帝ノ命ニ因リ制定セシ所タリ故ニ今試ニ我佛蘭西國ノ法律制度ヲ統合シ以テ之ヲ厦屋ニ喩フルニ凡百ノ工人ヲ督理シテ此厦屋ヲ建造シタル其匠頭ハ即チ拿破崙帝ニシテ既ニ其廢黜ニ遇ヒ帝位ヲ退キシ以来相繼テ三次ノ大變革ヲ經ルト雖モ嘗テ其建造シタル厦屋ニ於テハ毫モ損壞セズ依然トシテ猶全存シ拿破崙帝ノ裁定シタル諸般ノ制度今ニ相承ケ遵用スル既ニ如此ナレハ意フニ其建設シタル政體ノ大憲モ亦之ヲ循行ヒサ

ルノ理ナキヲ特ニ明カナリ是以テ余嘗テ數年
 以來沈潜反覆此等ノ事ヲ思念シ既ニ心ニ決セ
 シ故ニ更ニ夫ノ共和政治立國第八年ノ憲法即
 拿破崙一世ノニ原キ新タニ憲法ノ要領ヲ編成
 創定セシ者ニ以テ汝衆庶ニ告示シテ其可否ヲ汝衆庶ノ聽
 斷ニ任セント欲ス故ニ今余カ告示スル所汝衆
 庶ノ相與ニ許可スルヲ得ハ直ニ以テ我佛蘭西
 國憲法ノ基礎ト為ス可キニ因リ次ニ揭示スル
 ニ其趣旨ヲ以テス夫レ我此佛蘭西國ハ八百年
 來立君ノ政治ニシテ政府ノ權勢日ヲ逐ヒ増加

セシカ故ニ竟ニ王權ヲ以テ諸ノ侯伯ヲ廢滅シ
 政府ノ權ヲ一定シテ速カニ施行スルノ阻礙タ
 ル可キ事故ハ既ニ數次ノ大變革ニ因テ盡ク除
 去スルヲ得ルニ至リ而ノ斯ク其權ノ政府ニ歸
 スル國ニ於テハ常ニ衆庶ノ論ヲ以テ國家ノ利
 害得失之ヲ政府ノ長ニ歸ス故ニ其長タル者ハ
 國家衆務ノ責舉テ之ヲ其一身ニ任セサル可カ
 ラス然ルニ若シ憲法ノ首文ニ於テ其身敢テ其
 責ヲ負荷スル主者ニ非サルヲ記シ以テ衆議ノ
 是非ヲ適レント欲セハ是レ轉詐偽ヲ修飾シテ

夫ノ三次ノ大變革ニ因リ既ニ廢滅ニ至リシ偽
法ヲ更ニ舉ケ行ハント為ス者ト謂可シ故ニ今
余カ此ニ制定セント為ス憲法ハ汝衆庶ノ推擇
セシ政府ノ長汝衆庶ニ對シ自カラ其責ニ任シ
國ノ大事ハ汝衆庶ノ審決ニ委シ而ノ汝衆庶ヲ
シテ其長ニ信從倚賴スルノ意ヲ操捨存廢各其
自由ニ任セシメ敢テ強サレニ在リ余故ニ謂ラ
ク凡ソ今此政府ノ長ハ國家ノ衆務舉テ之ヲ一
身ニ集メ以テ自カラ其責ニ任スルニ在レハ要
スルニ施為其自由ヲ得テ妨碍ノ虞ナキヲ憲セ

サル可カラス故ニ大ニ其長ノ意ヲ啓沃シ以テ
相左右スルニ足ル貴重ノ宰相ヲ置テ其保護ニ
依ルヲ緊要トス然レ之ヲ往時ニ考レハ其宰相
タル者相與ニ聯結シ以テ專ラ庶政ノ責ニ任シ
常ニ政府ノ長ノ意ト議院ノ施設ヲ阻撓シテ其
勢相容サルカ故ニ宰相ノ除授日ニ相尋キ政府
建設ノ諸務之ヲ繼行スル能ハサルノ弊アリト
雖レ今余カ任用セントスル宰相ハ各其職ヲ分
チ交互連帶以テ其責ニ任セシメサレハ敢テ此
弊ヲ生スルノ虞ナク共ニ治化ヲ變理スルニ足

ル可シ然凡人ノ位階其貴重ヲ極メ施為其自由
 ヲ得テ民庶ノ依頼特ニ大ナル時ハ顧ミルニ又
 常ニ道理ヲ討論シ可否ヲ獻納スル輔翼ノ職數
 莫ヲ置キ以テ相諮詢ス可キニ在リ因テ更ニ參
 議ノ官ヲ設ケ政府ノ真正ナル輔翼ノ莫ニ充テ
 余カ制定スル政憲ノ主機ト為スヲ欲シ而ソ且
 其莫ニ充ル者ハ皆世故ニ諳練スル精妙ノ撰ヲ
 用ヒ之ヲ各異ノ委員ニ派シテ互ニ法律ノ議案
 ノ草セシメ更ニ其草案ヲ集議シテ辯論ヲ修飾
 セズ衆庶ノ與聽ヲ禁シテ仔細ニ相酌議セシメ

然ル後之ヲ議院ニ附シテ其許可ヲ得セシムル
 ニ在レハ思フニ政府ノ施為常ニ其自由ニ任シ
 施行スル所道理ニ戾ルノ憂ナキヲ得可シ故ニ
 此兩職ハ特ニ余ノ依頼スル所ト雖凡議院ノ國
 家ニ於ケル顧ミルニ又緊要ノ設ケタレハ之ニ
 附スルニ行政官ヲ監督スル權ヲ以テシ而ソ今
 其制ヲ舉クルニ蓋シ議院ノ代理者ハ其可否ヲ
 述フル多寡ニ從ヒ以テ法律及ヒ租稅ヲ議定セ
 シメ且其莫ヲ選舉スル制ハ必ス國內人民ノ投
 票ヲ用ヒ一人毎ニ之ヲ選舉セシメ數人ヲ合セ

選舉セシムルヲ聽サ、ル者是其受選者平生ノ器識才望之ヲ知ルノ容易ナルニ在テ又其代理者ノ數ヲ限定シ凡ソ二百六十員ニ過キシメサル者要スルニ事ヲ議スルハ其靜肅ナルヲ欲シ若シ其員ノ多キニ過クル徒ラニ喧囂ノ害ヲ生シ忿争ニ至リ易キノ弊ヲ防クニ在リ而ソ又此議院商議ノ旨趣ヲ普ク民庶ニ聞知セシムル其摘撮書ハ唯其議長ノ管照ヲ受ケ以テ記ス可キ官鑄新聞紙ニ之ヲ載スルヲ許スト雖凡往時ノ如ク偏頗ノ心ニ任セ互ニ異論ヲ立ル各自ノ

新聞紙上ニ印刷スルハ之ヲ禁ス可シ又此議院ハ自由ニ法律ノ議案ヲ商議シ其可ト為ス者之ヲ採用シ不可ト為ス者之ヲ拒止スルヲ得可シト雖凡從來政府施行ノ制度ハ頓ニ更改ヲ事トシ之ヲ紊亂シテ政府ノ處置ヲ妨害ス可カラズ殊ニ此議院ニ附スルニ法律議案ノ起草ヲ為スヲ禁セントスル者ハ蓋シ之ヲ議院ニ委シ以テ其意見ニ任スル時ハ或ハ員中ノ一代理者未タ其講究セサル諸般ノ事由ヲ建議シテ自カラ政府ノ權ニ代ラント為ス大弊害ノ生ス可キニ因

レリ而メ又此議院ノ負ハ敢テ往時ノ如ク宰相ト相對シ以テ法律ノ議定ヲ為サレメス且其議案ハ參議ノ員ヲシテ自カラ議院ニ至リ之ヲ酌議シテ互ニ其利害ヲ論シ是非ヲ辨セシムルカ故ニ徒ラニ糺糊タル事端ヲ固執シテ難詰謗罵交異見ヲ持シ到底此宰相ヲ黜ケ彼宰相ニ易フル目的ニ因リ執争辨駁以テ空ク時間ヲ費スニ至ル害ヲ除去ス可シ故ニ今此議院ノ商議ハ之ヲ閣院ノ獨議ニ附シ敢テ他ノ抑制ヲ受ケシメス以テ無益ノ争端ヲ開ク原由ヲ除去スレハ其

議案ヲ更改スル丁寧反覆徐ニ之ヲ裁酌シテ失當ノ虞ナキヲ得可ク而メ斯ク此議院ヲシテ其自由ニ任スルヲ得セシムル者蓋シ議院ノ代理者ハ我佛蘭西全國ノ民庶ニ代リ以テ國政ヲ議スル負タルカ故ニ重大ノ事務ハ必ス熟慮シテ之ヲ行フヲ要スルニ在ルナリ夫レ議院ノ設ケ既ニ如此ト雖凡顧ミルニ又一ノ會議ヲ設ケ我佛蘭西國中富有材能勲功ノ德望至當ナル者ヲ揆ミ之ヲ元老ノ職ニ任シテ其負ニ充ツ可キカ故ニ今此ニ其要ヲ舉クルニ凡ソ元老ハ往時ニ

於ケル上議院ノ懼色戰栗以テ下議院ノ商議ヲ
聽キ常ニ其議定ノ說ニ和同シテ屏息與議セシ
カ如クナラシメス蓋シ其職ハ憲法ヲ保護シテ
其法ト並行ス可キ國民自主ノ權ヲ管掌セシメ
而メ此大憲ニ據テ諸般ノ法律ヲ照查シ且新法
ヲ創定シテ之ヲ行政官ニ附シ又議院會集ノ期
外ニ生スル重大ノ難事ヲ理治シテ憲法ノ文義
ヲ釋明シ又其法ヲ行フニ緊要ノ諸事ヲ整備シ
テ其法ニ背反セシ命令ヲ廢止スル各般ノ權ヲ
有セシメ以テ國家ノ大益ヲ稽察シ法律ノ主腦

タル條件ヲ施行スル貴重ノ任ニ置キ而メ往時
裁判所ノ行フタル獨立不羈ニシテ國ヲ裨益シ
法ヲ保護スルカ如キ諸務ヲ管理セシメント欲
ス然レ今此元老ハ敢テ往時ノ上議院ニ於ケル
カ如ク之ニ任スルニ審判ノ職ヲ以テセス最第
一勸解者ノ分ヲ有セシメ以テ居間ノ任ニ置ク
者蓋シ若シ此官ヲ以テ罪犯檢治ノ裁判所ト為
ス時ハ意フニ必ス衆忌ヲ來シ私意ヲ恣ニスル
嫌ヲ受ケ人民欽仰ノ意ヲ失フテ怨怒ヲ政府ニ
傳フル資具タルノ譏ヲ招カシムルニ因レリ而

メ元老會議ノ設ケ既ニ如此ト雖凡顧ミルニ又大審院ヲ置キ以テ政府ノ長ト國ノ安寧トニ對スル罪犯ヲ審判セシム可キノ要タルカ故ニ更ニ上等裁判官吏ノ中ニ就キ以テ撰擢セシ者ヲ其負ニ充テ且佛蘭西全國中各州會議ノ代理者ヲ擇テ其陪審ト為スヲ欲ス凡上ニ陳スル所ハ蓋シ憲法ノ大旨ニレテ其詳カナルハ更ニ裁定ス可シト雖凡嘗テ拿破崙帝ノ參議官ニ告諭セシ其言ニ曰ク夫レ憲法ハ時ニ應シ勢ヲ視テ漸ニ裁酌ス可キニ在レハ宜シク後者ヲノ其改正

ヲ得セシムル便地ヲ餘シ以テ寛ニ之カ制ヲ定ムヘシト故ニ今余カ制定セントスル此憲法モ亦唯其分明ヲ欠ク可カラサル條件ノミヲ掲ケ敢テ我盛大ナル佛蘭西國民ノ運命ヲ羈勒限定セサル者是レ佛國若シ大患ノ生スルアラハ後人ヲシテ從來制定ノ法ヲ更改シ以テ國家ヲ安スル新法ヲ建テシム可キカ為メナリ是以テ元老ハ政府ト共議シ以テ憲法ノ中特ニ其重大ナラサル條件ハ之ヲ更改スルヲ得可シト雖凡今汝衆庶ト相議シ以テ決定セントスル此憲法ノ

大基礎ヲ更ニ更改セント欲スル時ハ復タ汝衆庶ノ許可ヲ得ルニ非サレハ敢テ更改ス可カラズ故ニ我佛蘭西ノ人民ハ常ニ其運命ヲ己レノ志願ニ從ヒ以テ自カラ定ムルヲ得可ク而ソ凡ソ憲法ノ基礎タル重大ノ事體ハ苟モ人民ノ意志如何ヲ問ハス之ヲ制定ス可カラス夫レ此等ノ趣旨ハ汝衆庶ノ既ニ余カ之ヲ實際ニ施行スルヲ許セシ所タルカ故ニ余カ嘗テ希望スル如ク此憲法ニ因テ我佛蘭西國ニ靜謐隆盛ノ福ヲ與ヘ禍亂ヲ醸シ凶害ヲ生スル原因ヲ塞キ且汝

衆庶ノ相與ニ余カ心ヲ竭レ治ヲ圖ルノ意ヲ容受レ以テ永ク上天ノ惠ヲ享クルヲ得ハ内外共ニ寧靜ニシテ余カ志ヲ達シ余カ職ニ於テモ亦成就ス可シ

○千八百五十一年十二月廿日及ヒ廿一日
 ノ投票ニ因リ佛蘭西人民ノ路易那破崙
 保那巴ニ授ケタル威權ヲ以テ制定シタ
 ル憲法

共和政治ノ大統領ハ

佛蘭西人民ノ路易拿破崙保那巴ニ其威權
 ヲ繼續セシメント欲レ且十二月二日ノ布
 令書ニ定メタル基礎ニ循ヒ憲法ヲ制定ス
 ルニ必要ナル威權ヲ授ク
 ト云フ決定ノ可否ヲ佛蘭西人民ヨリ述フ可

シト定メタルヲ熟思シ且

第一 十年間職ニ居テ責ニ任ス可キ政府ノ長

第二 行政官ノミニ属スル宰相

第三 法律ヲ草シ且議院ニ至テ其法律ヲ辨論スル為メ最著名ナル者ヲ任用スル

參議官

第四 法律ヲ商議シ可否ヲ述フル者ノ多寡ヲ以テ之ヲ議定スル議院但シ此議院ノ員ハ之ヲ選舉スルニ數名ヲ合シテ選

ム時ハ弊害ヲ生ス可キニ因リ佛蘭西全國ノ民投票ヲ用ヒ一名毎ニ之ヲ選ム可シ

第五 國中ノ貴顯才能ノ者ヲ選用スル元老院但シ此元老院ハ政府ト國民トノ威權ヲ平均シ且憲法及ヒ國民自由ノ權ヲ監察ス可キ者ナリ

此五條ハ國民ノ許可ヲ得可キ為メ示シタル憲法ノ基礎タルヲ熟思シ且

國民ノ之ヲ可ナリト應答スル者七百五十萬

人ナルヲ熟思シテ左ノ憲法ヲ布令ス

○第一章

第一條 憲法ヲ以テ佛蘭西人民ノ公權ヲ基礎タル千七百八十九年ニ布令セシ大趣旨ヲ認准シテ之ヲ確定ス

○第二章 共和政治ノ政體

第二條 〔千八百五十二年十二月廿五日廢ス〕佛蘭西共和政治ヲ統制スルノ權ハ方今共和政治ノ大統領タル皇族路易拿破崙保那巴ニ十年間之ヲ任ス

第三條 共和政治ノ大統領ハ宰相、參議官、元老院、議院ニ依テ國ヲ統治ス

第四條 立法ノ權ハ共和政治ノ大統領、元老院、議院相合同シテ之ヲ行フ

○第三章 共和政治ノ大統領

第五條 共和政治ノ大統領ハ佛蘭西人民ニ對シテ其責ニ任ス可ク且常ニ已レノ行フタル處置ノ可否ヲ佛蘭西人民ニ問フノ權アリ

第六條 共和政治ノ大統領ハ國ノ長ニシテ海陸軍ノ指揮ヲ為シ戰書ヲ投シ和親、聯盟、貿易

ノ條約ヲ結ビ諸ノ官眞ヲ撰任シ法律ヲ行フ
ニ緊要ナル規則ヲ制定シ命令ヲ布下ス

第七條 裁判ハ大統領ノ名ヲ以テ之ヲ行フ

第八條 法律ヲ起草スルノ權ハ大統領ノミニ
在リトス

第九條 〔千八百五十二年十二月廿五日廢ス〕大

統領ハ罪犯ヲ赦宥スルノ權アリ

第十條 大統領ハ法律及ヒ元老院ノ決定ノ允
許ヲ為シテ之ヲ布令ス

第十一條 〔千八百五十二年十二月廿五日廢ス〕

大統領ハ每歲文書又ハ言詞ヲ以テ國中諸務

ノ景狀アササキヲ元老院及ヒ議院ニ示ス

第十二條 大統領ハ一州又ハ數州等ニ攻圍ノ

景狀アササキ用ヒ諸事ヲ法律ヲ用ヒス兵律ヲ布令スル

ノ權アリ但シ勉メテ速カニ其旨ヲ元老院ニ

告ク可シ

攻圍ノ景狀ヨリ生ス可キ條件ハ法律ヲ以テ
之ヲ定ム

第十三條 宰相ハ國ノ長ニ屬スルノミニシテ

政府ノ所為中自己ニ管スル事務ニ付キ各自

ニ其責ニ任シ相連帶シテ責ニ任スルヲナク
且元老院ノ外其罪ヲ告訴ス可カラズ

第十四條 宰相、元老院參議官ノ官負及ヒ海陸
軍ノ士官、裁判役、其他ノ官負ハ左ノ誓詞ヲ述
ノ可シ

余ハ憲法ヲ遵守シテ大統領ニ忠節ヲ盡ス
トテ誓フ

第十五條 〔千八百五十二年十二月廿五日廢ス〕
元老院ノ決定書ヲ以テ共和政治ノ大統領ニ
其在職ノ時間毎歲給ス可キ金額ヲ定ム

第十六條 〔千八百五十二年十二月廿五日廢ス〕
共和政治ノ大統領若シ其任職期滿前ニ死ス
ル時ハ新ニ大統領ヲ選舉セシムル為メ元老
院ヨリ國民ヲ集會セシム可シ

第十七條 〔千八百五十二年十二月廿五日廢ス〕
國ノ長ハ元老院ノ書閣中ニ秘藏ス可キ文書
ヲ以テ佛蘭西國ノ利益ノ為メ己レニ代リ國
民ノ依頼ヲ受ケテ選舉ヲ得可キ者ノ姓名ヲ
國民ニ示スノ權アリ

第十八條 〔千八百五十二年十二月廿五日廢ス〕

新タニ共和政治ノ大統領ヲ選ムニ至ル迄ハ
元老院ノ長在職ノ宰相ノ資助ヲ得テ國ヲ統
制シ其在職宰相ハ政府ノ商議官ト為リ可否
ヲ述フル者ノ多寡ニ從ヒ諸務ヲ決議ス可シ

○第四章 元老院

第十九條 一千八百五十二年十二月廿五日廢ス
元老院ノ議員ハ百五十名ニ過ク可カラス但
シ最初ノ一年ハ之ヲ八十名ト定ム

第二十條 元老院ハ

第一 「カルヂナール」最モ高貴「マレシヤル」
ノ僧官

陸軍ノ最モ「アミラル」海軍ノ最モ
高貴ノ將帥

第二 共和政治ノ大統領元老ノ負ニ選舉
スルトヲ適當ナリト思量スル士民

此等ノ者ヨリ集成ス

第二十一條 元老ノ負ハ畢生間其職ニ居ラシ
メ之ヲ轉任セシム可カラス

第二十二條 一千八百五十二年十二月廿五日廢
ス元老ノ職ハ官俸ナク之ヲ行フ可シ然レ共
和政治ノ大統領ヨリ其功績ト其家産トニ准
シ一年三萬「フランク」ニ過キサル一身ノ俸給

ヲ與フルヲ得可シ

第二十三條 元老院ノ長及ヒ副長ハ共和政治ノ大統領元老員中ノ者ヨリ之ヲ選舉ス

此長及ヒ副長ハ一年間其職ニ任ス

其長ノ俸給ハ命令書ヲ以テ之ヲ定ム

第二十四條 共和政治ノ大統領ハ元老院ヲ集

會セシメ又ハ延會セシム○又大統領ハ命令

書ヲ以テ其集會ノ期限ヲ定ム

元老院ノ會議ハ衆庶ノ來聽ヲ許サス

第二十五條 元老院ハ憲法及ヒ國民自由ノ權

ヲ監察シ又如何ナル法律ト雖モ元老院ニ差
出サ、ル前ニ布令ス可カラス

第二十六條 元老院ハ

第一 憲法國ノ法教人倫ノ道、法教ノ自由、

國民自由ノ權、法律上ニ於テ國民平等ノ

權、財產所有ノ權ヲ侵ス可カラサル規則、

裁判役ヲ轉任ス可カラサル旨趣ニ背キ

又ハ其害トナル可キ法律

第二 佛蘭西領地ノ防禦ノ害トナル可キ、

法律

此等ノ法律ヲ布令スルヲ拒止ス可シ
第二十七條 元老院ハ其決定書ヲ以テ左ノ條
件ヲ規定ス

第一 佛蘭西藩屬ノ地及ヒ「アルゼリ」亞

利加洲ニアル
蘭西藩屬ノ地ノ憲法

第二 憲法中未タ制定ヲ經スシテ之ヲ施
行スルニ必要ナル條件

第三 憲法中ニ様ノ意ニ解ス可キ箇條ノ
真正ノ文義

第二十八條 其元老院ノ決定書ハ共和政治ノ

大統領ヨリ允許ヲ得可キカ為メ之ヲ大統領
ニ呈示シテ大統領之ヲ布令ス可シ

第二十九條 元老院ハ政府ヨリ憲法ニ背反シ
タルト為レ指示シタル法律及ヒ士民ヨリ願
書ヲ以テ憲法ニ背反シタルト為レ建言セシ

法律ヲ或ハ保存シ或ハ廢止ス

第三十條 元老院ハ共和政治ノ大統領ニ呈示
シタル啓告書ヲ以テ國ノ大益トナル可キ法
律草案ノ基礎ヲ制定スルヲ得可シ

第三十一條 又元老院ハ憲法ヲ更改スルノ申

立ヲ為スヲ得可シ若シ行政官之ヲ採用ス
 ハ時ハ元老院ノ決定書ヲ以テ之ヲ制定ス可
 シ
 第三十二條 然レ十二月二日ノ布令書ヲ以テ
 制定シ佛蘭西國民ノ許可ヲ得タル憲法ノ大
 基礎ヲ更改セント欲スル時ハ佛蘭西全國人
 民ノ投票ヲ以テ之ヲ為ス可シ
 第三十三條 議院ヲ解散シテ更ニ復タ集會ヲ
 為スニ至ル迄ハ元老院共和政治ノ大統領ノ
 申告ニ從テ急速ニ規則ヲ立テ政務ヲ執行ヲ

ニ必要ナル諸件ヲ備フ可シ

○第五章 議院

第三十四條 議院ノ員ノ選舉ハ人口ノ多寡ヲ
 以テ基礎トス

第三十五條 選舉ヲ為ス者三万五千人毎ニ付
 キ代理者一員ヲ議院ニ出ス可シ〔千八百五十
 七年五月廿七日換フ〕

第三十六條 國民ノ代理者ハ數名ヲ合シテ選
 舉ヲ為スヲナク全國人民ノ投票ヲ以テ一名
 毎ニ之ヲ選舉ス可シ

第三十七條 一千八百五十二年十二月廿五日廢
ス議院ノ員ハ官俸ヲ受クルヲナレ

第三十八條 議院ノ員ハ六年間其職ニ任ス

第三十九條 議院ノ員ハ法律ノ議案及ヒ租稅

ノ商議ヲ為シ可否スル者ノ多寡ニ從テ之ヲ
決定ス

第四十條 法律ノ議案ヲ取調フル任ヲ受ケタ

ル委員ノ採用セシ法律議案ノ更改書ハ之ヲ
討論セスシテ議長ヨリ參議官ニ送ル可シ若
シ參議官其改正ヲ採用セサル時ハ之ヲ議院

ノ商議ニ附スルヲ得ス

第四十一條 議院ノ通常ノ集會ハ之ヲ三月間

トシ其會議ハ衆庶ノ來聽ヲ許スト雖モ若シ
議院ノ員中五名ヨリ求ムル時ハ議院ノ總員
ヲ以テ隱密ノ議會ト為ス可シ

第四十二條 新聞紙ニ因リ又ハ其他衆庶ニ告

知ス可キ方法ニ因リ議院會議ノ諸件ノ摘撮
書ヲ公ケニ為スニハ各會議ノ終リニ於テ議
長ノ照管ヲ以テ記シタル所ノ論議ノ調書ヲ
用フ可シ

第四十三條 議長及ヒ副長ハ共和政治ノ大統領議負中ヨリ一年間之ヲ選舉ス○議長ノ官俸ハ命令書ヲ以テ之ヲ定ム

第四十四條 宰相ハ議負トナル可カラス

第四十五條 人民願書ヲ呈セントスル時ハ必ス之ヲ元老院ニ出ス可シ之ヲ議院ニ出ス可カラス

第四十六條 共和政治ノ大統領ハ議院ヲシテ集會セシメ又ハ延會セシメ或ハ解散セシム○之ヲ解散セシメタル時ハ大統領六月内ニ

更ニ復々議院ヲ集會セシム可シ

○第六章 參議官

第四十七條 通常職務ニ任スル參議官ノ員ハ四十人ヨリ五十人ニ至ル可シ

第四十八條 參議官ハ共和政治ノ大統領之ヲ任用シ且大統領之ヲ退任セシム可シ

第四十九條 共和政治ノ大統領ハ參議官ノ上席ヲ為シ若シ大統領不在ノ時ハ大統領ヨリ參議官副長ノ任ヲ與ハタル者其上席ヲ為ス可シ(千八百五十二年十二月三十日換フ)

第五十條 參議官ハ共和政治ノ大統領ノ指令ヲ受ケ法律ノ議案及ヒ行政ノ規則ヲ記シ且政治ノ諸務ニ付キ生ス可キ難事ヲ理治スルヲ任ス可シ

第五十一條 參議官ハ政府ノ名代トナリテ元老院及ヒ議院ニ對シ法律ノ議案ヲ論辯ス可シ
政府ノ名代トナリテ元老院及ヒ議院ニ對シ法律議案ノ論辯ヲ為ス任ヲ受クル參議官ハ共和政治ノ大統領之ヲ選任ス

第五十二條 參議官ノ官俸ハ二萬五千フランクトス

第五十三條 宰相ハ參議官ノ列ニ入りテ論辯ヲ為スノ權アリ

○第七章 大審院

第五十四條 大審院ハ共和政治ノ大統領及ヒ國ノ内部外部ノ安寧ニ對シ、重罪、暴行、陰謀ノ罪ヲ犯シタルノ訴ヲ受ケ呼出タサレタル者ヲ審判ス可シ但シ被告人大審院ノ言渡ニ服セスト雖モ之ヲ控訴スルヲ許サズ又其言

渡ノ取消ヲ覆審院ニ訴フルヲ許サス
共和政治ノ大統領ノ命令アルニ非サレハ大
審院ニ訴出スルヲ得ス

第五十五條 大審院ヲ建設スル法則ハ元老院
ノ決定書ヲ以テ之ヲ定ム

○第八章 總規則及ヒ假規則

第五十六條 現今行ハル、所ノ諸般ノ法律及
ヒ規則ノ憲法ニ違反セサル箇條ハ日後特ニ
之ヲ更改スルノ命アルニ至ル迄施行ス可シ
第五十七條 邑政ノ規則ハ別段法律ヲ以テ之

ヲ定ム可シ ○邑長ハ行政官ヨリ之ヲ任ス可
ク邑會議院ノ員外ニ於テ選舉スルヲ得可
シ

第五十八條 此憲法ハ之ヲ以テ制定シタル國
ノ大局ヲ設置セシヨリ施行ス可シ
十二月二日ヨリ此憲法ヲ施行スル日ニ至ル
迄ノ時間ニ共和政治ノ大統領ヨリ下シタル
命令ハ皆之ヲ法律ノ力アリトス

○憲法ヲ改正スル千八百五十二年十一月
七日ノ元老院決定書

元老院憲法第三十一條及ヒ第三十二條ニ循
ヒ商議ヲ為シテ左ノ條件ヲ決定セリ

第一條 皇帝ノ位ヲ復シ路易那破崙保那巴ヲ

第三世拿破崙ノ名稱ヲ以テ佛蘭西皇帝ト為
ス

第二條 皇帝ノ位ハ路易那破崙保那巴ノ嫡出

ノ宗系高曾祖父父母ヨリ孫ニ至ル迄ノ類ヲ云ノ子孫ニ於テ永

世女子及ヒ其子孫ヲ除キ年長ノ順序ヲ以テ
代々之ヲ男ヨリ男ニ傳フ可シ

第三條 路易那破崙保那巴ニ男子ナキ時ハ第

一世那破崙ノ兄弟中ノ男系ノ子及ヒ其嫡出
ノ卑屬ノ親ヲ以テ養子ト為スヲ得可シ

養子ヲ為スニ付テノ法式ハ元老院ノ決定書
ヲ以テ之ヲ定ム可シ

若シ養子ヲ為スノ後路易那破崙男子ヲ舉ク

ル時ハ先ツ其男子ヲシテ帝位ヲ嗣カシメ其
後ニ非サレハ其養子ヲシテ帝位ヲ嗣カシム

可カラス

路易那破崙ノ位ヲ嗣ク可キ者及ヒ其卑屬ノ
親ハ養子ヲ為スヲ禁ス

第四條 路易那破崙保那巴嫡出又ハ養子ヲ問
 ハス其位ヲ嗣ク可キ宗系ノ親ヲ遺留セサル
 時ノ為メ憲法ノ基礎ヲ定ムル勅書ヲ元老院
 ニ送り其書房中ニ藏メシメ其勅書ヲ以テ保
 那巴家族中ノ帝位ヲ嗣ク可キ者ノ順序ヲ定
 ム可シ

第五條 路易那破崙保那巴ノ嫡出又ハ養子ヲ
 問ハス帝位ヲ嗣ク可キ宗系ノ親ナク且其傍
 系伯叔父母及ヒ兄弟姊妹ノ類ヲ云ノ親族中ニ於テモ亦前條
 ニ記シタル勅書ニ循ヒ位ヲ嗣ク可キ者ナキ

時ハ政府ノ會議官トナリタル宰相ヨリ在職
 元老院長、議長、參議長ノ補佐ヲ以テ元老院ニ
 決定書ノ草案ヲ付シ元老院ニ於テ之ヲ決定
 シタル上國民ノ許可ヲ得可キカ為メ之ヲ出
 シシテ其許可ヲ得タル上皇帝ヲ立テ且其皇
 帝ノ家族中ニ於テ永世女子及ヒ其子孫ヲ除
 キ代々其位ヲ男ヨリ男ニ傳フ可キ順序ヲ定
 ム可シ

新ニ皇帝ヲ立ル事ノ完成スルニ至ル迄ハ在
 職ノ宰相政府ノ會議官トナリ可否ヲ迷フル

者ノ數ニ從ヒ國ノ諸務ヲ統制ス可シ

第六條 路易那破崙保那巴ノ家族中ニ於テ後ニ帝位ヲ嗣クノ權アル者及ヒ男女ヲ問ハス其卑屬ノ親ハ之ヲ皇族ナリトス○此皇族ハ元老院ノ決定書ヲ以テ其等位ヲ定ム可シ○其皇族ハ皇帝ノ允許ヲ得スレテ婚姻ヲ結フ可カラス○若シ其允許ヲ得スレテ婚姻ヲ結ビタル時ハ其婚姻ヲ結ヒタル皇族及ヒ其卑屬ノ親後ニ帝位ヲ嗣ク可キノ權ヲ失フ可シ然レ其妃ノ死スルニ因テ其婚姻ヲ解キタル

時其婚姻ニ因リ子ヲ舉ケサルニ於テハ其婚姻ヲ結ヒタル皇族後ニ帝位ヲ嗣ク可キノ權ヲ復ス可シ

路易那破崙保那巴ノ其他ノ家族ノ尊称等位ハ路易那破崙之ヲ定ム可シ
 皇帝ハ其家族中ノ諸人ヲ指令スルノ權ヲ有シ且法律ノカアル勅書ヲ以テ其家族ノ權利義務ヲ定ム可シ

第七條 千八百五十二年一月十四日ノ憲法箇條中ニテ此決定書ニ背カザル條件ハ舊ニ依

テ之ヲ施行シ其憲法ニ定メタル方法ト體裁トニ非サレハ之ヲ更改ス可カラス

第八條 千八百五十一年十二月二日及ヒ四日

ノ勅書ヲ以テ制定シタル法式ニ循ヒ佛蘭西人民ノ許可ヲ得可キ為メ左ノ告文ヲ示ス可シ

佛蘭西國民帝位ヲ復シ路易那破崙保那巴ヲ立テ皇帝ト為シ其嫡出又ハ養子タル宗系ノ卑屬ノ親ヲシテ代々其位ヲ嗣カシメント欲シ且千八百五十二年十一月七日ノ

元老院決定書ニ記シタル如ク路易那破崙保那巴ニ其家族中ニ於テ帝位ヲ嗣ク可キ者ノ順序ヲ定ムル權ヲ與フ

○十一月廿一日及廿二日ノ國民ノ投票ニ因リ確定シタル千八百五十二年十一月七日ノ元老院決定書ヲ布令シテ法律ト為ス千八百五十二年十二月二日ノ勅書

天ノ惠愛ト民ノ思望トニ因リ佛蘭西皇帝ノ位ニ居ル那破崙普ク衆庶ニ告テ曰ク千八百五十二年十一月七日ノ元老院決定書ニ循ヒ

佛蘭西人民帝位ヲ復シ路易那破崙保那巴
 ヲ立テ皇帝ト為シ其嫡出又ハ養子タル宗
 系ノ卑屬ノ親ヲシテ代々其位ヲ嗣カシメ
 ント欲シ且千八百五十二年十一月七日ノ
 元老院決定書ニ記シタル如ク路易那破崙
 保那巴ニ其家族中ニ於テ帝位ヲ嗣ク者ノ
 順序ヲ定ムル權ヲ與フ
 ト云フ大趣旨ノ告文ヲ國民ノ許可ヲ得可キ
 為メ示シタルヲ考思シ且議院ノ公告書ニ
 國民ノ其告文ノ可否ヲ投票ヲ以テ定ムル

ノ事ヲ障碍ナク正當ニ完成シ其告文ノ可
 否ヲ述フル者ノ投票ヲ總計スルニ可ナリ
 ト為ス者ノ數七百八十二萬四千百八十九
 人
 否ナリト為ス者ノ數二十五萬三千百四十
 五人
 可否ヲ述ハサル者ノ數六萬三千三百二十
 六人タル
 ヲ証セレトヲ考思シ左ノ條件ヲ命令ス

第一條 十一月廿一日及ヒ廿二日ノ國民ノ投

票ヲ以テ確定シタル千八百五十二年十一月七日ノ元老院決定書ハ之ヲ布令シテ國ノ法律ト為ス

第二條 路易那破崙保那巴ハ第三世那破崙ノ名稱ヲ以テ佛蘭西ノ皇帝タリ

○千八百五十二年十一月七日ノ元老院決定書ノ第四條ニ循ヒ保那巴ノ家族中ニ於テ帝位ヲ嗣ク可キ者ノ順序ヲ定ムル
千八百五十二年十二月十八日ノ憲法ノ基礎タル勅書

第一條 余ノ嫡出又ハ養子ヲ問ハス宗系中ニ

於テ位ヲ嗣ク可キ者ヲ遺留セサル時ハ

余カ敬愛スル叔父「ゼローム那破崙保那巴」又

ハ此叔父ノ瓦敦堡國ノ公主「カテリー」スト結

ヒタル婚姻ヨリ生スル嫡出ノ宗系ノ卑属ノ

親余ニ代リ永世女子ヲ除キ年長ノ順序ヲ以

テ代々男ヨリ男ニ傳ヘ帝位ヲ嗣ク可シ

第二條 此書ハ國璽ヲ印シ我首相之ヲ元老院ニ送り其書房中ニ藏ス可シ

○千八百五十二年一月十四日ノ憲法ヲ釋

明シ且之ヲ更改スル千八百五十二年十月廿五日ヨリ三十一日ニ至ル元老院決定書

第一條 皇帝ハ罪犯ヲ赦宥シ大赦ヲ行フノ權アリ

第二條 皇帝自カラ適當ナリト思量スル時ハ元老院及ヒ參議院ニ上席ス可シ

第三條 憲法第六條ニ循ヒ結ヒタル貿易ノ條約ハ其條約ニ於テ裁定シタル稅則ヲ更改スルト雖モ猶法律ノ力アリトス

第四條 公同ノ資益トナル可キ諸般ノ工業殊ニ千八百三十二年四月廿一日ノ法律ノ第十條及ヒ千百四十一年五月三日ノ法律ノ第三條ニ記スル工業并ニ其他總テ國ノ裨益トナル可キ諸般ノ起作ハ皇帝ノ勅書ヲ以テ之ヲ命令シ又ハ允許ス可シ
此勅書ハ行政規則ノ為メ定メタル法式ニ循ヒ之ヲ記ス可シ
然レ政府ノ會計局ニ於テ人民ト契約ヲ結ビ又ハ人民ヲ資助シテ工業及ヒ起作ヲ為サン

トスル時ハ其工業及ヒ起作ヲ為ス前ニ法律ヲ以テ其金額ヲ備フ可キヲ允許シ又ハ其契約ヲ允准ス可シ

政府ノ利益ノ為メノミニ施行シテ人民ニ任カス可ラザル種類ノ工業ヲ急速ニ行ハント為ス時ハ臨時費用ノ金額ヲ備フ可キ為メ定メタル法式ヲ以テ其金額ヲ備フ可シ但シ議院ノ最近ノ集會ノ時其旨ヲ告ケテ其允許ヲ受ク可シ

第五條 千八百五十二年三月廿二日ノ憲法ノ

基礎タル勅書ノ規則ハ皇帝ノ勅書ヲ以テ之ヲ更改スルヲ得可シ

第六條 日後或ハ帝位ヲ嗣ク可キノ權アル懿親及ヒ其卑屬ノ親ヲ稱シテ佛蘭西皇族ト云フ

皇帝ノ長子ヲ稱シテ皇太子ト云フ

第七條 佛蘭西ノ皇族滿十八歳ノ齡ニ至リシ時ハ元老院及ヒ參議院ノ員ニ列ス可シ

然レ皇帝ノ允許ヲ得タル上ニ非サレハ元老院及ヒ參議院ニ出席ス可カラス

第八條 皇族ノ身上證書

民法ニ

詳ナリハ首相之ヲ受

取り皇帝ノ命ヲ以テ元老院ニ送り元老院ニ

於テ之ヲ簿冊ニ登記シ且其書房中ニ藏ス可

シ

第九條 帝位ニ属スル入額及ヒ皇帝ノ歳俸ハ

各其在位間別段ハ元老院決定書ヲ以テ之ヲ

定ム可シ

第十條 皇帝ノ親ク任ス可キ元老ノ員ハ百五

十名ニ過ク可カラス

第十一條 元老ノ職ニ即キタル者ハ畢生間三

萬フランクノ年給ヲ受ク可シ

第十二條 經費ノ見積書ハ政府ノ各宰相局ニ

於テ其入用ノ額ヲ章條ニ分チ之ヲ議院ニ出

ス可シ

其見積書ハ政府ノ各宰相局毎ニ議院ニ於テ

之ヲ決議ス可シ

政府ノ各宰相局ノ為メ許シタル經費ノ額ヲ

章毎ニ分派スルヲ參議院ニ於テ下シタル

皇帝ノ勅書ヲ以テ定ム可シ

又同上ノ法式ニ循フタル別段ノ勅書ヲ以テ

其經費見積書中ノ一章ヲ他ノ一章ト換ルル
ヲ許ス可シ○此規則ハ千八百五十三年ノ見
積書ニ之ヲ用フ可シ

第十三條 憲法ノ第四十二條ニ記シタル摘撮
書ハ之ヲ公ケニ為ス前ニ議長及ヒ議院各局
ノ長ヨリ集成シタル掛リ官負ニ示ス可シ若
シ之ヲ可トスル者ノ數ト非トスル者ノ數ト
相均シキ時ハ議長ノ説ヲ以テ決ス可シ
議院ノ席上ニ於テ誦讀ス可キ會議ノ調書ニ
ハ議院ノ所為及ヒ可否ヲ述フル者ノ數ノミ

ヲ記ス可シ

第十四條 議院ノ員ハ通常ノ集會又ハ臨時ノ
集會ノ時間毎月二千五百フランクノ俸給ヲ
受ク可シ

第十五條 後備兵隊ノ指揮官ハ議員ノ列ニ加
ハルヲ得可シ○其指揮官現ニ兵役ニ即ク
時ハ千八百五十二年十二月一日ノ勅書ノ第
五條及ヒ千八百三十九年八月四日ノ法律ノ
第三條ニ循ヒ議員ノ職ヲ退キタル者ト看做
ス可シ

第十六條 憲法ノ第十四條ニ定メタル誓詞ハ左ノ如クナリトス

余ハ憲法ヲ遵守シ皇帝ニ忠節ヲ盡クスヲ誓フ

第十七條 千八百五十二年一月十四日ノ憲法ノ第二條第九條第十一條第十五條第十六條第十七條第十八條第十九條第二十二條第三十七條ハ之ヲ廢ス

○帝位ニ属スル入額ヲ支配スルニ付キ千八百五十六年四月廿三日ノ元老院決定

書

一條 皇帝ノ入額ヲ支配スル者ハ其入額ヲ生スル財産及ヒ皇帝私有ノ領地ヲ所有スル權ニ管シタル訴ニ付キ或ハ原告トナリ或ハ被告トナリテ裁判所ニ出ツルノ特權アリ
又其者ハ千八百五十二年十二月十二日ノ元老院決定書ノ規則ニ循ヒ皇帝私有ノ領地ヲ交換スル証書及ヒ其他ノ證書ヲ記シ且之ヲ許可スルノ特權アリ
又千八百四十一年五月三日ノ法律ノ第十三

條及ヒ第廿六條ニ定メタル場合ニ於テハ公
同ノ資益ノ為メ皇帝私有ノ領地ヲ政府ニ交
付スルコトヲ承諾シテ其償ヲ收取ス可ク且其
收取セシ金額ハ不動産ヲ買入レ又ハ政府ニ
貸シテ之ヲ使用ス可レ但シ其償ノ金額ヲ算
還ス可キ政府ハ之ヲ使用スルノ方法ヲ監察
スルニ及ハス

○攝政ノ事ニ付キ千八百五十六年七月十
六日ノ元老院決定書

○第一章 攝政

第一條 皇帝ハ滿十八歳ノ齡ニ至ル迄幼年ナ
リトス

第二條 幼年ノ皇帝位ニ昇リ其父タル先帝其
薨去ノ前ニ公ケニ布告セシ書ヲ以テ特ニ攝
政ノ職ヲ定メタルコトナキ時ハ幼帝ノ母タル
先帝ノ皇后攝政ノ職ニ任シ其子タル幼帝ノ
保傅ヲ為ス可シ

第三條 若シ先帝ノ皇后再婚ヲ為ス時ハ攝政
ニ任スルノ權ト其子タル幼帝ノ保傅ヲ為ス
ノ權ト失フ可シ

第四條 先帝ノ皇后攝政ノ職ニ任シタルト否
 トヲ問ハス若シ其皇后ノ薨去シ且先帝公ケ
 ノ書又ハ秘密ノ書ヲ以テ特ニ攝政ノ職ニ任
 ス可キ者ヲ定メシトナキ時ハ第一等ノ佛蘭
 西國皇族攝政ノ職ニ任シ若シ又其アラサル
 時ハ他ノ佛蘭西國皇族其帝位ヲ嗣ク可キ親
 近ノ順序ニ從ヒ攝政ノ職ニ任ス可シ
 皇帝ハ公ケノ書又ハ秘密ノ書ヲ以テ後帝幼
 年ノ時間攝政ノ職ニ任スル者ノ欠位トナル
 時代テ其職ニ任ス可キ者ヲ預定スルトテ得

可シ

第五條 攝政ノ職ニ任スルトテ得可キ佛蘭西
 國皇族ノアラサル時ハ在職ノ宰相攝政ノ會
 議官トナリ後ニ攝政ヲ撰任スルニ至ル迄國
 ノ諸務ヲ統制ス可シ
 其宰相ハ可否ヲ述フル者ノ數ニ從ヒ諸務ヲ
 議定ス可シ
 皇帝薨去ノ後攝政ノ會議官ヨリ直ニ元老院
 ヲ集會セシム可シ
 攝政ノ會議官ヨリ申立タル者ノ中ニテ元老

院攝政トナル可キ者ヲ撰任ス可シ
 皇帝特ニ攝政ノ會議官ヲ任セサル時ハ政府
 ノ會議官タル宰相元老院議院參議官ノ在職
 長官ノ補佐ヲ以テ元老院ヲ集會セシメ且攝
 政トナル可キ者ヲ申立ツ可シ
 第六條 攝政及ヒ攝政會議ノ員ハ佛蘭西人ニ
 シテ滿二十一歳以上ノ齡タル可シ
 第七條 皇帝ノ攝政ヲ任シ又ハ攝政ノ會議官
 ヲ任スル書ハ元老院ニ送リ其書房中ニ藏ス
 可シ

若シ皇帝秘密ノ書ヲ以テ攝政及ヒ攝政ノ會
 議官ヲ任シタル時ハ皇帝ノ薨去ノ後直ニ元
 老院ニ於テ集會ノ招ニ應シタル元老議員ノ
 面前及ヒ宰相並ニ法式ニ循ヒ召集レタル議
 長參議長ノ面前ニテ元老ノ長官其書ヲ開封
 ス可シ
 第八條 攝政ノ職ニ任スル者ノ行フ所ハ皆幼
 帝ノ名ヲ以テ之ヲ為ス可シ
 第九條 皇帝ノ丁年ニ至ル迄ハ攝政ヲ為ス皇
 后又ハ其他攝政ノ職ニ任シタル者皇帝ニ代

テ十分帝權ヲ執行フ可レ但レ攝政ノ會議ニ於テ有ス可キ權ハ格別ナリトス
 皇帝ノ身體ヲ保護スル為ノ法律ハ攝政ニ任セレ皇后及ヒ攝政ニモ亦通シテ用フ可レ
 第十條 攝政ニ任セシ皇后又ハ攝政ノ職務ハ皇帝薨去ノ時ヨリ直ニ之ヲ行フ可レ
 然モ攝政ノ職ヲ任スルニ付テ秘密ノ書ヲ元老院ニ送り其書房中ニ藏メタル時ハ其書ヲ開封セシヨリ後ニ非サレハ攝政ノ職務ヲ行フ可カラス○其書ヲ開封スルニ至ル迄ハ第

五條ニ記スル所ニ循ヒ在職ノ宰相國ノ諸務ヲ統制ス可レ
 第十一條 若シ幼帝其位ヲ嗣ク可キ皇帝ヲ遺留シテ薨去セシ時ハ更ニ別段ノ法式ヲ行フ
 ナク其攝政ニ任セシ皇后又ハ攝政其職ヲ繼續シテ行フヲ得可レ
 第十二條 嗣位ノ順序ニ因リ攝政ノ職ニ任セシ皇后ノ子ニ非ザル幼帝位ヲ嗣クナル時ハ其皇后攝政ノ職ヲ罷ム可レ○此場合ニ於テハ此元老院決定書ノ第四條又ハ第五條ニ

記スル所ニ循ヒ攝政ヲ任ス可レ

第十三條 幼帝ノ薨去レ他系ノ幼帝其位ヲ嗣
クテアル時ハ嘗テ任レタル攝政其幼帝丁年
ニ至ル迄ノ間繼續レテ其職ヲ行フ可レ

第十四條 此元老院決定書ニ定メタル所ノ佛
蘭西國皇族未タ相當ノ年齢ニ至ラス又ハ其
他法律上ニ別段定メタル原由ニ因リ幼帝ノ
薨去セシ時攝政ノ職ニ任スルコトヲ得サル時
ハ嗣帝ノ丁年ニ至ル迄在職ノ攝政繼續レテ
其職ヲ行フ可レ

第十五條 先帝ノ皇后其子タル幼帝ノ攝政ニ
任セシ時ノ外ハ攝政ノ職ニ任シタル者幼帝
ノ保傅ヲ為スノ權ナシ
幼帝ノ保傅ヲ為シ其家事ヲ指令シ及ヒ其教
育ヲ管照スル等ノ諸事ハ其母后之ヲ為ス可
シ幼帝ノ生母ナキ時又ハ先帝ノ時ニ任シタ
ル者ナキ時ハ攝政ノ會議官ヨリ任シタル者
幼帝ノ保傅ヲ為ス可シ
攝政及ヒ其卑屬ノ親ハ幼帝保傅ノ職ニ任ス
可カラス

第十六條 攝政ニ任セシ皇后又ハ攝政先帝ノ在世中ニ攝政ノ職ヲ行フニ付キ誓詞ヲ述ヘサル時ハ元老院議院ノ貞並ニ參議貞ノ面前ニテ佛蘭西國皇族、攝政ノ會議官、宰相政府ノ貴重ナル官貞、^レヅラ^ン、ドノール^ル爵ノ大十字形ノ賞牌ヲ佩ル者ノ立會ヲ得テ皇帝ノ位ニ坐スル幼帝ノ前ニ至リ經典ヲ證トシテ其幼帝ニ向ヒ誓詞ヲ述フ可シ

又攝政ノ會議官、宰相、元老院ノ長、議長、參議官ノ長ノミノ面前ニ於テ幼帝ニ向ヒ誓詞ヲ述フ

ルヲ得可シ

此場合ニ於テハ攝政ニ任シタル皇后又ハ攝政ヨリ布告ヲ為レテ其誓詞ヲ述ヘタルヲ公ケニ為ス可シ

第十七條 攝政ニ任セシ皇后又ハ攝政ノ述フ可キ誓詞ハ左ノ如シ

余ハ皇帝ニ忠節ヲ盡シ憲法、元老院ノ決定書、國ノ法律ニ循ヒ統制ヲ為シテ國民ノ權及ヒ帝位ニ屬スル權ヲ保護シ且己レノ權ヲ行フニ付キ皇帝及ヒ佛蘭西國ノ為メ忠

誠ヲ勵ミ皇帝ノ丁年ニ至リシ時余カ委任
ヲ受ケタル威權ヲ正シク皇帝ニ返還スル
ヲ誓フ

此誓詞ノ調書ハ首相之ヲ記シ且之ヲ元老院ニ
送リテ其書房中ニ藏ス可シ

其調書ニハ攝政ニ任セシ皇后又ハ攝政及ヒ
皇族、攝政ノ會議官、宰相、元老院ノ長、議長、參議
官ノ長其姓名ヲ手署ス可シ

○第二章 攝政ノ會議官

第十八條 攝政ノ會議官ハ皇帝ノ幼年ナル時

間之ヲ任ス可シ

其會議官ノ員ハ左ノ者ヨリ之ヲ集成ス

第一 皇帝ノ兼任シタル佛蘭西國皇族

皇帝ノ特ニ兼任シタル者ナキ時ハ帝位

ノ嗣ク可キ順序ノ最近ナル皇族ニ員

第二 皇帝ヨリ公ケノ書及ヒ秘密ノ書ヲ

以テ任シタル者

若シ皇帝此會議官ノ員ヲ兼任セサル時ハ元
老院此會議官ノ一部ヲ為ス可キ為メ特ニ五
名ヲ兼任ス

佛蘭西國皇族ヲ除クノ外攝政會議官ノ一員
又ハ數員ノ死去シ又ハ退任シタル時ハ元老
院其者ニ代ヘ更ニ他人ヲ撰任ス可シ

第十九條 攝政ノ會議官ハ攝政ニ任セン皇后
又ハ攝政ヨリ之ヲ退職センム可カラス

第二十條 攝政ノ會議官ハ攝政ニ任セン皇后
又ハ攝政之ヲ集會センメ且其上席ヲ為ス可
シ

攝政ニ任セン皇后又ハ攝政ハ攝政ノ會議官
ノ負タル佛蘭西國皇族又ハ其他攝政ノ會議

官ノ員ヲ以テ自己ニ代リ其會議官ノ上席ヲ
為サシムルヲ得可シ

第二十一條 攝政ノ會議官ハ可否ヲ述フル者
ノ數ニ從ヒ左ノ條件ヲ議定ス可シ

第一 皇帝ノ婚姻

第二 戰書ヲ投シ又ハ和親聯盟貿易ノ條

約ヲ結フ事

第三 憲法ノ基礎ヲ立ツル元老院決定書
ノ議案ヲ草スル事

若シ可ナリトスル者ノ數ト否ナリトスル者

ノ數ト相均シキ時ハ攝政ニ任セシ皇后又ハ攝政ノ説ヲ以テ決定ヲ為ス可シ○若シ攝政ニ任セシ皇后又ハ攝政ノ名代人攝政會議官ノ上席ヲ為ス時モ亦皇后又ハ攝政ノ説ヲ以テ此決定ヲ為ス可シ

第二十二條 攝政ノ會議官前條ニ記セシ以外ノ事ニ付キ攝政ニ任セシ皇后又ハ攝政ヨリ相談ヲ受ケタル時ハ唯其助言ノミヲ為ス可シ

○第三章 諸種ノ規則

第二十三章 攝政ヲ任シタル時間皇帝ノ入額ヲ支配スルノ方法ハ定則ニ循フ可シ

其入額ヲ使用スル方法ハ攝政ニ任セシ皇后又ハ攝政ノ命ニ從ヒ通常ノ法式ヲ以テ之ヲ定ム可シ

第二十四條 攝政ニ任セシ皇后又ハ攝政ノ自己ノ費用及其家事ヲ理ムル費用ハ皇帝歲俸中ノ一部トス○其額ハ攝政ノ會議官之ヲ定ム可シ

第二十五條 幼帝ノ位ヲ嗣キシ時攝政不在ニ

シテ先帝ノ薨去スル前ニ特ニ預定セシ事十
キニ於テハ其攝政ノ来着ニ至ル迄此元老院
決定書ノ第五條ニ記スル所ニ循ヒ國ノ諸務
ヲ統制ス可シ

○憲法ノ第三十五條ヲ更改スル千八百十
七年五月廿七日ノ元老院決定書

第一條 憲法ノ第三十五條ハ左ノ如ク之ヲ更
改ス

選舉ヲ為ス人民三萬五千人毎ニ代理者一
員ヲ議院ニ出ス可シ然レ一州ニテ選舉ヲ

為ス人ノ餘數一萬七千五百人ニ過クル時
ハ其州ニ於テ更ニ代理者一員ヲ議院ニ出
スヲ得可シ

第二條 此元老院決定書ニ循ヒ皇帝ノ勅書ヲ
以テ各州ニ於テ選舉ス可キ代理者ノ姓名簿
ヲ規定ス可シ

○議院ノ員ニ選舉ヲ得ント欲スル者投票
ヲ始ムルヨリ前八日內ニ千八百五十二
年十二月二十五日ノ元老院決定書ノ第
十六條ニ定メタル誓詞ヲ記セシ書ヲ州

長ノ官署ニ納ム可キヲ規定シタル千八百五十八年二月十七日ノ元老院決定書

第一條 議院ニ選舉ヲ得ント欲スル者ハ投票ヲ始ムルヨリノ前八日內ニ千八百五十二年十二月廿五日ノ元老院決定書ノ第十六條ニ定メタル誓詞ヲ記シ自己ノ姓名ヲ手署シタル書ヲ議員ノ選舉ヲ為ス州長ノ官署ノ書記局ニ自カラ納メ又ハ公正ナル證書ヲ以テ任シタル名代人ヲシテ之ヲ納メシメサレハ選

舉ヲ受ルヲ得ス
其書ニハ

余ハ憲法ヲ遵守シ且皇帝ニ忠節ヲ盡ス
ヲ誓フ

ト云フ語ノミヲ記ス可ク若シ此規則ニ背ク時ハ其書ノ効ナカル可シ
其書ヲ納ムル時ハ其受取書ヲ與フ可シ

第二條 議院ノ員ニ選ヲ得ント欲スル者姓名ノ公告檢事ノ官署ニ納ム可キ議院選舉ノ廻帖及ヒ投票ノ分派并ニ貼附ハ其選舉ヲ得シ

ト欲スル者前條ノ規則ニ循ヒレ後ニ非サレ
ハ之ヲ為ス可カラス
前條ノ規則ニ循ハサル前ニ選舉ヲ得ント欲
スル者姓名ノ公告議院選舉ノ廻帖及ヒ投票
ノ分派并ニ貼附ヲ為ス時ハ千八百四十九年
七月廿七日ノ法律第六條ニ記スル所ノ刑ニ
處セラレ可レ

第三條 議院ノ眞ノ選舉ヲ為ス時間相當ノ定
期內ニ此元老院決定書ノ第一條記セシ諸件
ヲ行フタル者ハ其姓名書ヲ州長ノ證セシ後

之ヲ選舉ノ官署ニ納ム可レ

第四條 此元老院決定書ノ第一條ノ規則ニ循
ハサル選舉ヲ得ント欲スル者ノ姓名ヲ記シ
タル投票ハ其効ナク後ニ投票ノ數ヲ算計ス
ル時之ヲ算入ス可カラス唯之ヲ選舉ノ調書
ニ附加ス可レ

○憲法及ヒ殊ニ其第四十條第四十一條ヲ
更改シタル千八百六十六年七月十八日
及ヒ廿二日ノ元老院決定書

第一條 憲法ハ元老院ニ於テ裁定シタル法式

ヲ以テ討論ヲ為スノ外他ノ官司ニ於テ之ヲ
 討論ス可カラス
 憲法ヲ更改シ又ハ釋明スル事ヲ目的ト為タ
 ル願書ハ元老ノ五局中ノ三局以上ニ於テ其
 願書ヲ取調フ可キノ允許ヲ為シタル時ニ非
 サレハ元老院ノ大會議ニ差出ス可カラス
 第二條 刺期刊行ノ書及ヒ貼附ノ書又ハ千八
 百五十二年二月十七日ノ勅書第九條ノ第一
 項ニ定メタル紙幅ノ大サニシテ期ヲ刺セス
 刊行スル書ニ因リ憲法ヲ謗議シ又ハ更改ス

ル事ヲ目的ト為シテ刊行シ及ヒ再刊シタル
 議論文ハ之ヲ禁ス
 憲法ヲ更改シ又ハ釋明スル事ヲ目的ト為シ
 タル願書ハ之ヲ差出シタル元老院會議ノ摘
 撮書中ニ登記スルノ外之ヲ刊行シテ公ケニ
 為ス可カラス
 此條ノ規則ニ背ク時ハ五百フランクヨリ一
 萬フランクニ至ル迄ノ罰金ヲ以テ罰ス可キ
 罪アリトス
 第三條 千八百五十二年一月十四日ノ憲法ノ

第四十條ハ左ノ如ク更改ス

法律ノ議案ヲ取調フルノ任ヲ受ケタル委員ノ採用セシ法律議案ノ更改書ハ議長ヨリ參議官ニ送ル可シ

其委員又ハ參議官ノ採用セサル其更改書ハ議院ニ於テ之ヲ熟思シ更ニ取調ヘシムル為メ其委員ニ送還ス可シ
若シ其委員更改書ニ從ヒ議案ヲ改タム可キ事ヲ申立サル時又ハ委員ヨリ申立タル更改書ヲ參議官採用セサル時ハ其議案ノ

原本ノミヲ議ス可シ

第四條 議院ノ通常ノ會議ノ時間ヲ三月ニ限定セシ千八百五十二年一月十四日ノ憲法ノ第四十一條ノ規則ハ之ヲ廢ス○但シ皇帝ノ勅命ヲ以テ會議ヲ終フ可キヲ言渡ス可シ
議院ノ員ノ受ク可キ官俸ハ其會期ノ長短ヲ問ハス通常ノ會議毎ニ一萬二千五百フランクタル可シ、

臨時ノ會議ノ時ハ千八百五十二年十二月廿五日ノ元老院決定書ノ第十四條ニ記スル所

2330
50

44620

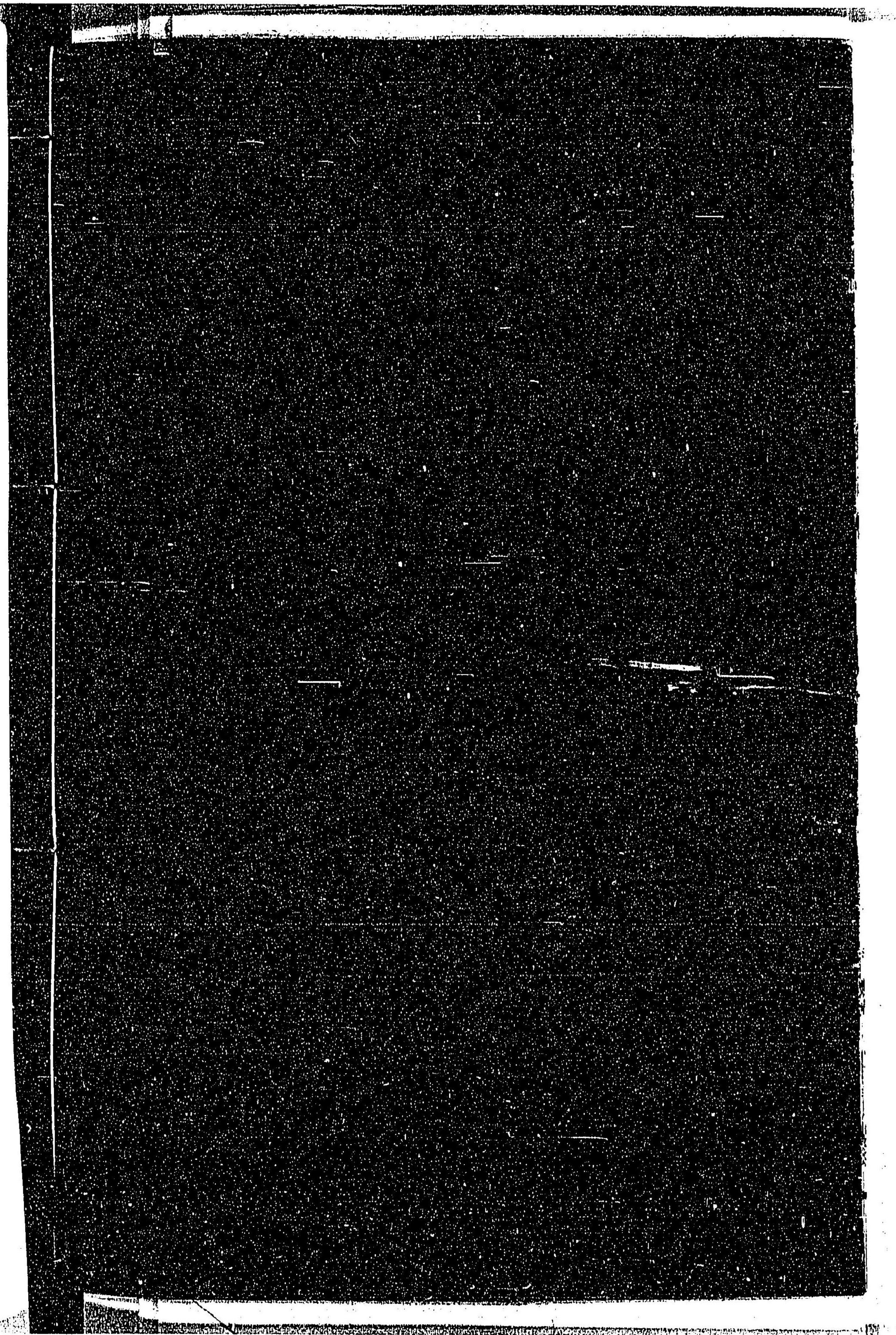
法律書憲法

ニ循ヒ其官俸ヲ定ム可シ

辻
士
革
校

佛蘭西
法律書
憲法終





CF2
3
07



031101-001-1

CF2-3-07

仏蘭西法律書

文部省

M3-7

BBC-0750



CF2
3
07



Vertical text or markings on the left side of the page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is highly obscured and illegible.